

随筆「蟻」にみられるハーンの理想社会

先川, 暢郎

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

73

(開始ページ / Start Page)

217

(終了ページ / End Page)

222

(発行年 / Year)

1990-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004679>

随筆「蟻」にみられるハーンの理想社会

先 川 暢 郎

- I はじめに
- II 蟻の社会について
- III 蟻社会から学ぶもの
- IV 結 論

I はじめに

ラフカディオ・ハーン（1850—1904）が動植物や昆虫類を深く愛したことは広く知れわたっているところである。例えば、スズムシ、クツワムシ、マツムシ、クサヒバリなどの鳴く虫をその季節になると買ってきて、その音色に耳をかたむけるのを楽しみにしていたし、セミ、チョウ、アリ、カジカなどにも興味を示していた。また、昆虫類の姿形を大へん好み、コーヒーカップ、ペン皿、文鎮、封筒、キセルなどの自分の身の回りの物には、とりわけ昆虫類の模様や彫りものをついたものを用いた。

また、彼はその著作においても、これらの昆にかんする随筆をたくさん書いている。その中で、例えば、「螢」⁽¹⁾について、その内容をみると、螢の発光器官について科学的な説明をしたり、螢を美的な鑑賞の対象としてとらえて、螢のことを詠んでいる日本古来の和歌をとりあげて論じている。また「虫の音楽家」⁽²⁾の中では、昆虫が非常に洗練された芸術的国民の美的生活において、重要な地位を占めていると述べ、日本の古典文学である「源氏物語」を引きあいにして、美しい鳴き声の虫を飼う習慣に言及している。更に「チョウ」⁽³⁾の中では、無実の罪をうらんで自害した美人がかんざしとなって仇討の手助けをする「飛んで出る蝴蝶の簪」という俗劇を引きあいにして、チョウを詠んだ句は、この題目の審美的方面にかんして、日本人がどんな興味をもっているかを説明するうえで役に立つだろうと述べ、蕉村、芭蕉、一茶等の作品を引用したり、また、「トンボ」⁽⁴⁾の中では、50種類ものトンボの名をあげ、日本人は10世紀以上にわたってトンボの詩を作ってきており、詩の好題材として今日の

詩人達によって愛好されていると述べているのである。

それに対して、「蟻」においては、「螢」、「虫の音楽家」、「チョウ」、「トンボ」におけるような方法は、一切とられていない。つまり、蟻を科学的な対象としてでもなければ、美的な対象としてとらえるのでもなく、ひたすら、社会的な存在としてのみとらえて、その社会性を論じているのである。そして、この蟻の社会とは、ハーンに言わせれば、生物学上、及び倫理学上重要なある種の社会現象は、「最も高度の進化をとげた蟻生活」(the most highly evolved societies of ants) においてのみ研究しうるの⁽⁶⁾であり、「蟻の習性ほど完全無欠な、実際的な心の習性を養うことのできるものは皆無である」(no human being could cultivate a mental habit so impeccably practical as that of the ant)⁽⁶⁾ ような、人間社会が最終目標とすべき理想社会だというのである。

それでは、その社会を、具体的には、どのようなものとハーンが考えているかについて以下において考察していくことにする。

Ⅱ 蟻の社会について

ハーンは、蟻社会における雌雄の役割について、まず、次のように述べている。つまり、雄は労働には全然関与せず⁽⁷⁾、ごく少数のある特殊な階級の「母体として選ばれた雌」(the true females, — the Mothers-Elect)⁽⁸⁾ だけが、この種族の母体として、ある限られた、ごく短期間のみ雄の配偶者となる⁽⁹⁾。そして、その他の雌は、「子を生むために費されるすべての精力」(All energies which, in the fertile female, would be expended in the giving of life) を「攻撃力や労働能力発達の方角へ向けたと想像される」(seem here to have been diverted to the evolution of aggressive power, or working-capacity) 結果、兵隊や労働者に分化しているのである⁽¹⁰⁾。そして、これらの雌の行なう労働は、すべてみな国家のためにするものであって⁽¹¹⁾、「利己的な快楽に対する能力」(Every capacity for egoistic pleasure) も、他の能力と同様に、生理的変革により抑制されており⁽¹²⁾、「純然たる利己的な面に使役されうる個性」(individuality capable of being exercised in a purely selfish direction) を蟻は全然持っていない⁽¹³⁾のだという。

つまり、蟻生活のある進歩した種類のものには、その大多数の個々のものには、性というものが全然欠如しているものであり、しかも、この性的機能の実践

上の抑制ないし調節は、自発的なもののように思われる⁽¹⁴⁾ということをも、ハーンは最も驚くべき発見として述べているのである。

要するに、ハーンによれば、蟻社会こそは、彼の尊敬するハーバート・スペンサーが、道徳進化の理想として述べている「利己主義と利他主義とが、たがいに区別のないまま融和折衷されている国家」(a state in which egoism and altruism are so conciliated that the one merges into the other)であり、非利己的な行為をするという喜びが、唯一の有能な喜びになっている国家⁽¹⁶⁾なのであり、それ故に、その倫理的状態こそが、最も注目に値するものなのである。

Ⅲ 蟻社会から学ぶもの

蟻と人間とを比べた場合、社会進化に関して、蟻の方が、むしろ「超人(“beyond man”）」的に進歩しており⁽¹⁶⁾、どんな人間の精神にしる、蟻の精神の絶対的な実際性に到達することは、とうてい不可能であり⁽¹⁷⁾、人間の徳行について、われわれが最も完服するような理想も、蟻の倫理に比べると、その遅れていることは数万年を下らないのであると⁽¹⁸⁾ハーンは述べているのである。

そして、彼は、昆虫社会において表われているその倫理的状態を、幾百万年という間、最も強烈な欲望に対抗しつつ、死にもの狂いに固守してきたその努力によって、はじめて到達できたものであると位置づけ、我々人類も、それと同じように、この残酷な欲望にぶつかって、ついにそれを克服しなければならぬかもしれない⁽¹⁹⁾と考えているのである。

そしてさらに、宗教的な動機やその他のさまざまな非利己的な動機から、独身生活を宣誓する人が、今日ですら多数あるということを出発点として、今よりも、さらに高い進化をとげた人類が、その性生活の大部分を人類共存の幸福のために、よろこんで犠牲に供するであろうということは考えられないことでもなかろうと⁽²⁰⁾その考えを発展させているのである。

しかし、これらの考えは、ハーンが自ら創り出したものというよりも、いずれ人類は、倫理的に蟻の文明と比較できるある文化状態に到達するだろうというスペンサーの信念⁽²¹⁾に基づくものだけということができよう。

そして、その考えをおし進めて、「社会の完全な均等状態は、社会的昆虫である蟻がすでにそれを解決しているように、性生活の抑制によって、経済問題を解決する何らかの手段が発見されない限り、完全にそれに到達することは

きないのであり、その手段が発見され、また、今日性生活に費されているいろいろな力を、もっと高等な活動の発展の方へ移すことができた時には、未来の民族は、蟻と同じように、男性の進化よりもむしろ、女性の進化をへて、男女いずれとも性別のつかぬ大多数のものが、人類の最高部類を占めるのではなからうか⁽²²⁾」と、ハーンは未来についてさえも推測しているのである。

つまり、ハーンは、昆虫生物学の事実が、人類進化の未来について、非常に多くの暗示を与えている⁽²³⁾と述べているのであるが、その暗示とは、“生物学的な進化”に関するものではなく、“社会的な進化”に関するものなのである。

そして、これらのことから、無私の力こそが最高の力である⁽²⁴⁾と考えているハーンは、蟻社会を通して、自ら、進んで善い行ないをするという喜びが、義務という観念を不必要とする社会や、本能的な道義心があらゆる種類の道徳法典を不必要とする社会、そこに住んでいるものはみんな生まれながらにして、絶対に利己心がなく、しかも善に強く、道徳的修養のごときは、いたずらに貴重な時間の浪費にしかかなりえないというような、——ハーンがそれまで夢にも考えなかったような——社会の形態が、この世の中に存在しうるのだということを、事実として認識するに至っているのである。

Ⅳ 結 論

ハーンは、以上でみてきたように、ハーバート・スペンサーの進化論の影響の下で、蟻社会に人間社会の理想を見、人類の叡智の増加こそは、人間の多産を犠牲に供してはじめて成しとげられるものだ⁽²⁵⁾と考え、性を超越した高等人類は、いうに一千年の寿命という夢を実現することができるかもしれない⁽²⁶⁾と述べているのであるが、そこには、自分のしなければならぬ仕事の量に比べて、われわれの寿命が短かすぎ、しかも、新しい発見は絶えず加速度的に増加し、知識が間断なく増大していくために、時が進むにつれ、ますます寿命の短いことをなげく理由が、一層強まっていくにちがいない⁽²⁷⁾という、ハーンの現実の生活における実感ともあせりとも思えるものが、根底にあるのではなからうか。そして、彼が人間の長寿を望むとき、その代価として、蟻の払った代価が考えられるのであり、それ故に、彼は、ついには、その代価がはるか昔にとり払われてしまって、子孫を生む力が、種族の、形態的に分化した一階級のものに限られているような惑星が、どこかに存在するかもしれない⁽²⁸⁾とさえ、推測しているのである。

このように、ハーンにおいては、蟻自体の寿命が長いのか短いのかに関しての生物学的な考察は全くなされないままに、人類が長寿であることを望むとき、1人が長く生きることは、当然子孫を多産してはいけなないことだとして、その長寿の代価として、性の超越ということが考えられ、主張されているのだということができらるであらう。

なお、このハーンの主張は、子どもの出生率の低下と平均寿命が延びたことによる高齢化社会の到来や、女性の高学歴化にともなう結婚しない女性、子どもを産みながらぬ女性の増加という今日の世相を、みごとに予言していると言えなくもないであらう。

しかし、蟻社会から類推したものとはいえ、子孫を生む力を、母性として選ばれたある特殊な階級のものに限定し、他はその精力をすべて攻撃力や労働能力の発達の方へ向け、利己心を捨て、ひたすらに、兵隊、労働者として、国家のために尽すのが理想社会だというハーンの考えは、——彼自身は、ヨーロッパのキリスト教圏の人間であるため、独身を通し、自己をすてて、皆のためにのみ生きる者として、まず第一に宗教的聖者のイメージを頭の中にえがいて、述べているのであらうが——解釈の仕方によっては、高度に機能的で組織的な楽園の幻想（未来社会）を先取していたのではなからうか。

注

- (1) Lafcadio Hearn: *Kottō: Fireflies*, pp. 142-168. Yushodō Booksellers LTD., 1982年。
- (2) Lafcadio Hearn: *Exotics and Retrospectives: Insect-Musicians*, pp. 39-43, pp. 76-80. Yushodō Booksellers LTD., 1982年。
- (3) Lafcadio Hearn: *Kwaidan: Butterflies*, pp. 183-193, pp. 305-308. Yushodō Booksellers LTD., 1981年。
- (4) Lafcadio Hearn: *A Japanese Miscellany: Dragon-flies*, pp. 83-116. Yushodō Booksellers LTD., 1982年。
- (5) Lafcadio Hearn: *Kwaidan: The Ants*, p. 223. Yushodō Booksellers LTD., 1981年。
- (6) *Ibid.*, p. 224.
- (7) 注(6)に同じ。
- (8) *Ibid.*, p. 229.
- (9) *Ibid.*, p. 227.
- (10) *Ibid.*, pp. 228-229.
- (11) *Ibid.*, p. 225.
- (12) *Ibid.*, pp. 231-232.
- (13) 注(6)に同じ。

- (14) Ibid., p. 231.
- (15) Ibid., p. 221.
- (16) Ibid., p. 220.
- (17) 注(6)に同じ。
- (18) 注(5)に同じ。
- (19) Ibid., p. 237.
- (20) Ibid., pp. 238-239.
- (21) Ibid., p. 234.
- (22) Ibid., p. 238.

The state of perfect social equilibrium will be approached, but never quite reached, by mankind—Unless there be discovered some means of solving economic problems, just as social insects have solved them, by the suppression of sex-life.

Supposing that such a discovery were made, and that the human race should decide to arrest the development of sex in the majority of its young,—so as to effect a transference of those forces, now demanded by sex-life to the development of higher activities,—might not the result be an eventual state of polymorphism, like that of ants? And, in such event, might not the Coming Race be indeed represented in its higher types,—through feminine rather than masculine evolution,—by a majority of beings of neither sex?

- (23) Ibid., p. 240.
- (24) 注(23)に同じ。
- (25) Ibid., pp. 237-238.
- (26) Ibid., p. 239.
- (27) 注(26)に同じ。
- (28) 注(26)に同じ。

その他の参考文献

- (1) 小泉八雲著 (平井呈一訳) 『日本雑記』 (恒文社) 1975年。
- (2) 小泉八雲著 (平井呈一訳) 『怪談』・『骨董』 (恒文社) 1975年。
- (3) 小泉八雲著 (平井呈一訳) 『異国風物と回想』 (恒文社) 1975年。
- (4) 田部隆次著 『小泉八雲』 (北星堂) 昭和55年。